朝日遺跡

調査の経過

昭和60年に始まった本センターによる調査も、本年度で第４次調査となり、昭和47年に県教育委員会によって調査が開始されてから、中断を含めてすでに17年経過したことになる。しかしなお新しい事実を蓄積しつつある。　（石黒立人）

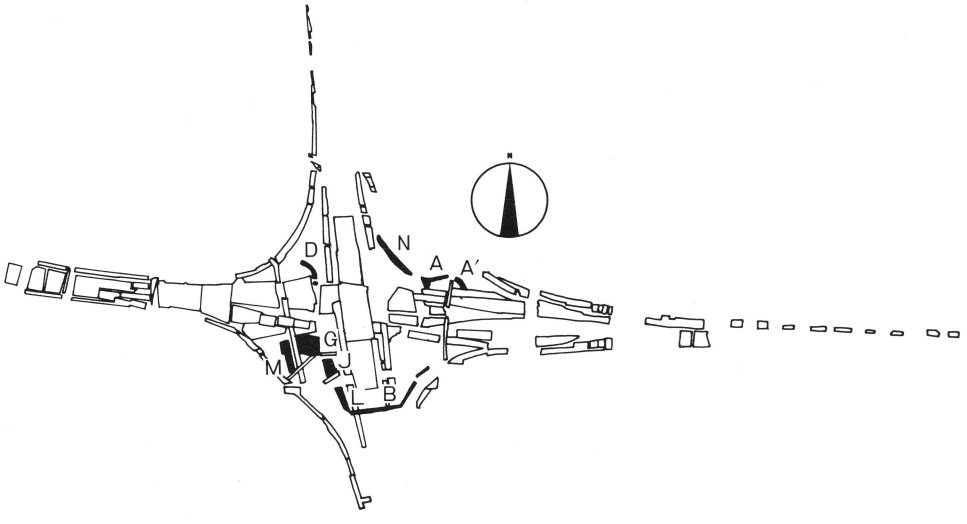
調査の概要

AA′・N区は，谷Ｂを挟んで東西に位置する。基本層序は、ともに水田耕土以下にⅠ：灰色粘土、Ⅱ：灰褐色シルト、Ⅲ：黒褐色シルト（弥生時代包含層）、Ⅳ：明青灰色シルト（弥生時代基盤）となる。遺構の少ない地区では局所的にⅣ層上部に弥生時代基盤として黒褐色シルトが分布する。

Ａ区では谷Ｂ南半と若干の遺構が、A′区では谷Ｂに平行する大溝（ＳＤ01）１、掘立柱建物１を検出した。ＳＤ01の上層からは若干の木製品が出土した。A′区では朝日遺跡で初めて縄文時代後期の遺構（ドングリピット２基）を検出した。

ドングリピット２基は、谷ＢとＳＤ01の間にあり、谷Ｂに平行する深さ約15cmの溝状の落ち込み（ＳＸ01）下に存在した。そのうちの１基では、ピット内上部に、底部を欠くが、ほぼ完形の縄文時代後期の土器が遺存し、下部からドングリが出土した。

Ｎ区では、弥生時代中期前半に属す竪穴住居群と大溝、後半に属す方形周溝墓群を検出



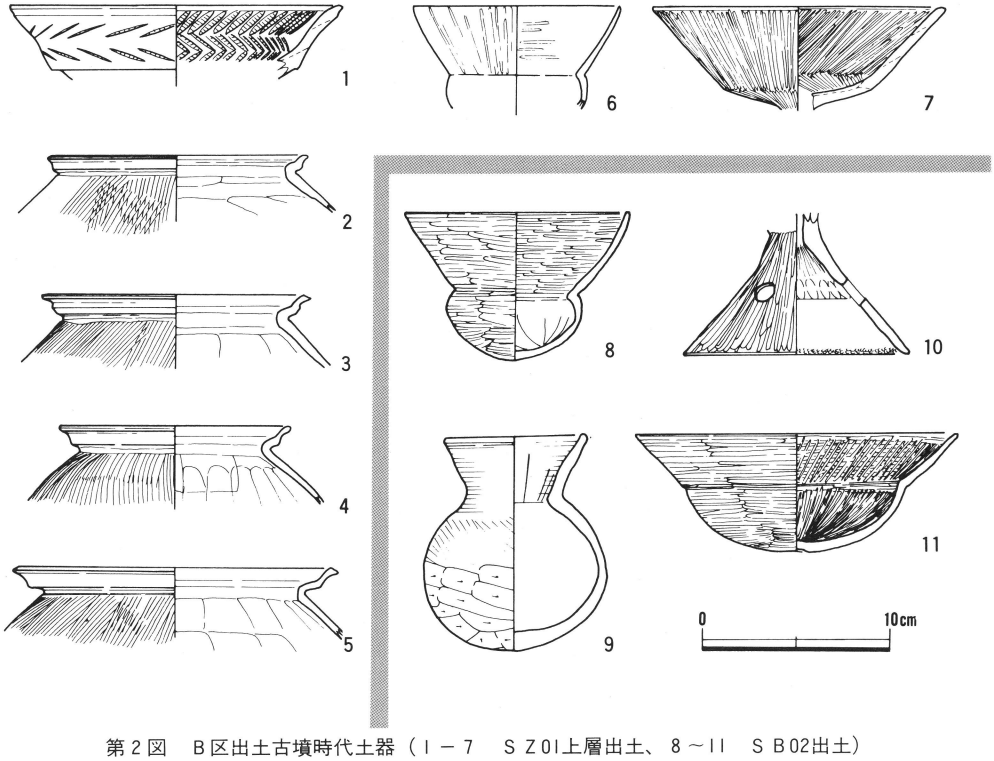
第１図　調査区位置図

した。住居は円形１、方形３で、円形住居内にはカキを主とする貝殻が廃棄されていた。方形周溝墓は少なくとも６基存在するが、周溝からの完形に近い土器出土例は１例と少ない。　（飴谷　一）

Ｂ区

Ｂ区は細長い調査区のため遺構の面的な把握は困難であったが、それでも「旧河道Ｃ」と呼ばれた谷部分の断面を調査できたこと、この谷西方で古墳時代住居と弥生時代後期方形周溝墓などを検出できたことは成果であった。

谷部分は、下半部の堆積層が砂層と植物遺体（流木含む）からなり、また基盤面がすべて砂であった点で、これまで知られていた谷Ｃの様相とは大きく異なることが注目される。自然地形としての谷・河道ではない可能性がある。古墳時代住居はほぼ正方形に近いプランで４本柱をもつ。底面からは土器多数と砥石が出土した。元屋敷期の新しい段階に位置づけうる。弥生時代後期方形周溝墓は全体の半分弱を検出したにすぎないが、周溝からは山中式に属す華麗な土器が出土した。周溝埋土上部からは古墳時代住居と同時期の土器が出土している。　（石黒立人）



第２図　Ｂ区出土古墳時代土器（１－７　ＳＺ01上層出土、８～11　ＳＢ02出土）

Ｊ区

Ｊ区は検見塚の南に位置する。基本層序は、水田耕土以下に、Ⅰ：灰色粘土層・Ⅱ：黒色砂質シルト、Ⅲ：黄灰色シルト層（基盤）である。調査区南隅は旧調査区と重なる。

Ⅱ層上面において中世方形土坑８基を検出し、他にⅠ層が不整方形に落ち込む個所において、古墳時代前期の住居１軒を検出した。

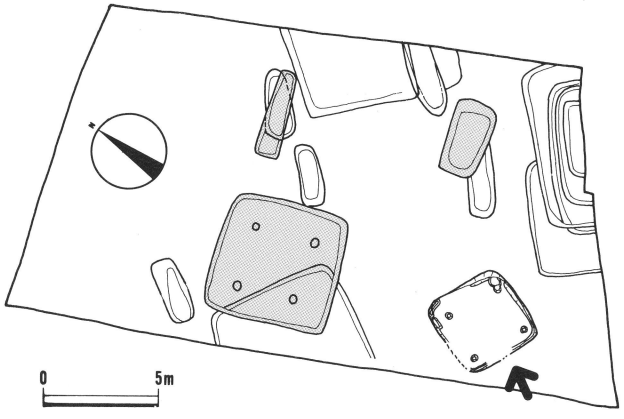
Ⅱ層は、弥生時代各期の遺構による攪乱が著しく遺構検出が困難なため、把みすい黄灰色シルト層上面での遺構に検出した。その結果、住居・土坑を中心とする弥生時代中期～後期の遺構を多数検出することができた。弥生時代後期後半（欠山期）の住居と確定できる資料は、本遺跡において今回が初見となる。また、調査区北隅では、弥生時代後期の溝の南肩を検出した。埋土中に貝を含む様子であるが、調査区外に及ぶため、確認するには至らなかった。

本調査区では特に注目したいのは、弥生時代後期後半（欠山期）の遺構に見られる方向性である。この時期の住居・土坑には、Ｎ－72°－Ｅ[註]の傾きを持つもの（Ａ群：スクリーントーン表示）と、Ｎ－47°－Ｅ[註]のもの（Ｂ群）の２群が存在する（第３図）。もしこのような方向性が広い範囲にわたるなら重要である。本調査区が南居住域中央近くに位置していること、Ａ・Ｂ群に含まれる土坑が隅丸長方形という特殊な形状を呈していることも含め、この様な方向性の問題は、南集落の中心地の様相を解明する上での手がかりとなる一資料と考える。

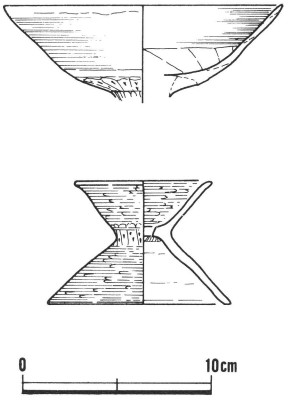
註：方向は隅丸長方形土坑の長軸を基準とし、角度は該当遺構の平均値　　（岡本直久）

Ｌ区

Ｌ区は南居住域南隅に位置する。基本層序は、水田耕作以下・Ⅰ：灰色粘土層、Ⅱ：黒



第３図　Ｊ区住居と土坑（矢印は古墳時代住居）



第４図　Ｊ区古墳時代住居出土土器

色砂質シルト・Ⅲ：黄灰色砂層（基盤）である。

まず、Ⅱ層上面を遺構検出面として調査を開始し、中世方形土坑４基を検出した。その内３基は調査区北東隅にあり、Ⅱ層に若干達している程度であった。南東隅の１基は深さ0.5mを測る。また、調査区南隅においてⅠ層の溝状落ち込みが２条認められたため、これを掘り下げたところ、東西方向の溝２条を検出した。これらは、2.5mの間隔を置いて平行する。北の１条（ＳＤ01）は幅４ｍ、深さ1.2mを測る。山中期に掘削され、欠山期に至り埋没し始める過程で再利用されている。南環濠の内環濠と考えられる。南の１条（ＳＤ02）は、幅2.5m、深さ１ｍを測り、山中期のうちで埋められている。当初、これを外環濠と考えたが、欠山期に使用されないことから、外環濠は欠山期に位置の変更が行われるか消滅すること、あるいはＳＤ02が元々外環濠ではないことなどの可能性が考えられる。今後、重要な問題として検討していく必要がある。

Ⅱ層は、断面での分層は可能だが、平面的な検出が困難なため、黄灰色砂層上面において遺構を検出した。住居は弥生時代中期のものを中心とする。土坑は炭化物、焼土が幾層も重なる袋状土坑、貝の廃棄土坑等を検出した。（岡本直久）

Ｍ区

Ｍ区はＪ区の西に位置する。基本層序は、Ⅰ：黄灰色粘土、Ⅱ：茶褐色砂質シルト、Ⅲ：黒褐色砂質シルト、Ⅳ：黄灰色シルト、Ⅴ：灰色粗砂である。各層の時期は、Ⅰ層：中世、Ⅱ層：弥生時代後期から古墳時代、Ⅲ層：弥生時代中期から後期に対応すると考える。そしてⅣ層は調査区北側の基盤、Ⅴ層は調査区南側の基盤である。基盤の状態はⅤ層が南から北へ緩やかに下降し、その勾配を埋める形でⅣ層が堆積しており、Ⅳ・Ⅴ層がほぼ同一レベルで平坦面を形成している。この上面から遺構の展開がみられる。

確認し得た遺構のうち、住居は12軒あり、円形住居１（弥生時代中期）の他はすべて隅丸方形住居（ほとんどが弥生時代後期か）であり、火災に遭ったと考えられる住居（弥生時代後期）も１軒検出した。

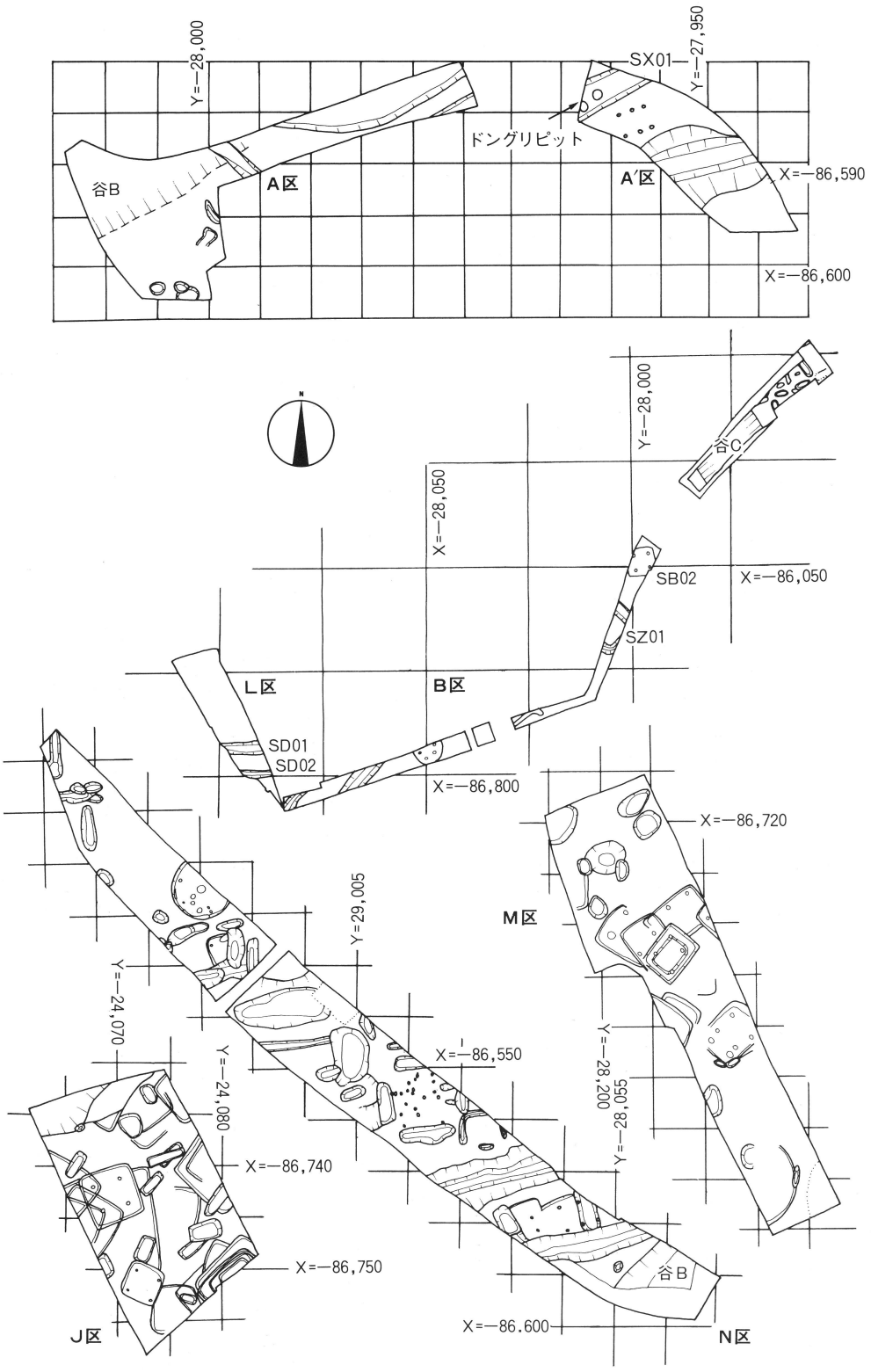
土坑はうち１基は古墳時代前期に属し、その他は弥生時代中・後期に属する。中には廃棄坑と思われる多量の土器が詰まっていた土坑もあった。（飴谷　一）

まとめ

１．A′区で検出したドングリピットは、朝日遺跡の理解を縄文時代にまで拡げざるを得なくした。集落の存在を考慮しなければならない。

２．古墳時代住居跡の好例をＢ・Ｊ区で検出した。該期に集落のあることはこれで確定。

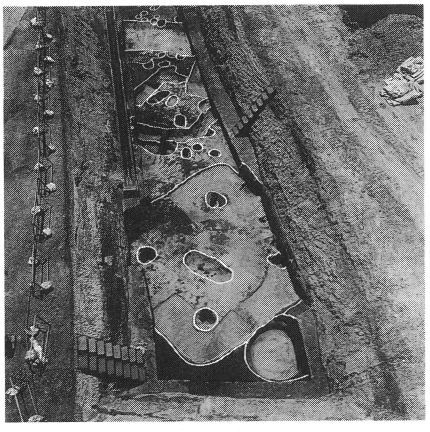
（石黒立人）



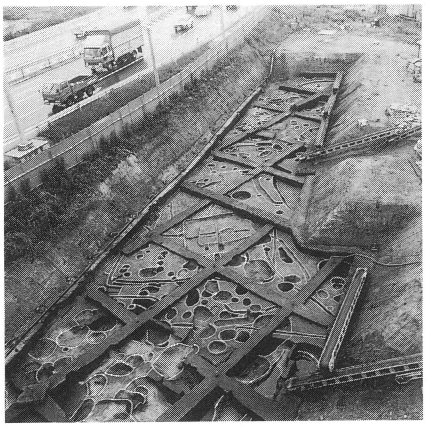
第５図　各調査区遺構配置図

A′区

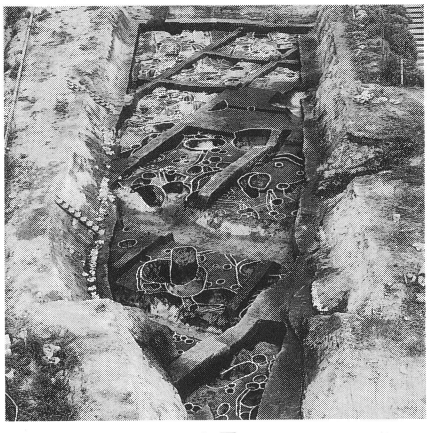
N区



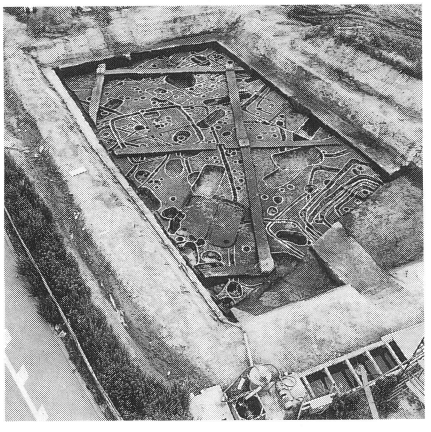
B区



M区



L区



J区